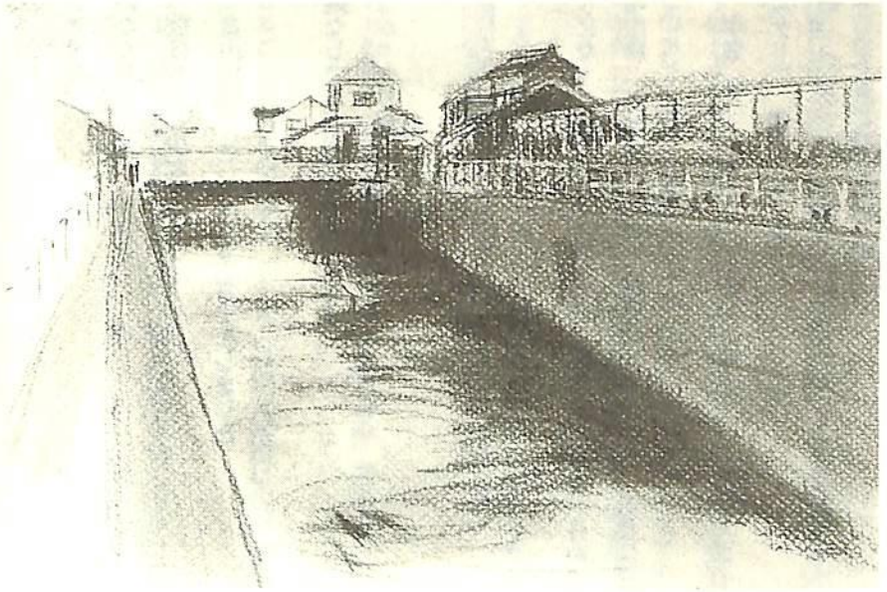
二、校長通信



砂　川（画：加納睦久）

水源を奥山田池に発し、広田川・矢作古川に流れ込み、やがて三河湾に注いでいる。「砂川コイ」も群れをなして泳ぎ、夕日に照らされた川面の美しさは思わず人の足を止める。

さわやかな一日のはじまり

「おはよう。」

「おはよう。」

「おはようございます。」

「おはようございます。」

低学年の子供たちは、かけた言葉と同じ言葉であいさつが返ってきます。高学年になると、「おはよう。」に対して、「おはようございます。」と言ってくれる子が多い。元気の良い子に混じって、恥ずかしそうに小さい声であいさつする子、にこっとほほえんでいる子、声がなくとも、笑顔であればまだ良いが、さみしそうな顔には心配になります。そんな時には、もう一度声をかけます。

ふしぎなことに、あいさつは、二人の間の距離に関係があります。近いほどスムーズにいきます。それでも遠くから元気にあいさつをしてくれる子がたくさんいて嬉しい限りです。特にスポーツ少年団や部活動で頑張っている子は、声が大きく、とてもさわやかです。あいさつは明るくはっきりしているのがよろしい。

二軒の喫茶店での経験です。一軒のお店では、「いらっしゃいませ。」の声があり、店を出る時は、「ありがとうございました。」「お気をつけて。」などありました。

もう一軒のお店では、何のあいさつもありません。一人のお客が店から出ていきました。ドアーから外へ出たか出ないかの時に、小さな声で「ありがとうございました。」と言ったようです。私は、せっかく言ったのに、お客さんには聞こえなかっただろうと思いました。

同じあいさつでも、お互い顔を見てあいさつしたいものです。（おはよう、元気ですか、私も元気です。今日もお互い頑張りましょう。）という気持ちが通じるからです。明るくあいさつできる子は、きっと家庭でも、毎日明るい会話ができていることでしょう。

さわやかな一日がはじまるために、私たち大人が大いにあいさつをしていきましょう。

上地の風で風車がまわった

四月十六日午後一時神奈川県相模原市の岩中電気さんより風車（発電機）が届き、社長さん以下三人がさっそく取り付けにかかってくれました。高さ六メートルの支柱の上に、さらに一・五メートルのマストをつけ、その上部へ発電機をつけます。その発電機に二枚羽根と尾を取りつけます。ボルト一本一本のあつかいもていねいです。重量三十キログラムの風車の試運転です。上地の風が吹いてきました。直径二・七メートルの風車がゆっくり回り始めました。工事一切を担当して頂いている松田電気さんと教頭先生、菅沼先生そして子供たちと風車を見上げました。順調な回り具合を喜び合いました。

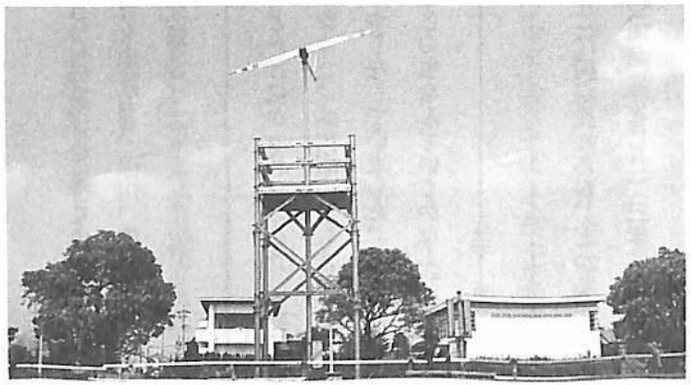
四月二十四日、四本の支柱の一角に風速計が取りつけられ、

慎重に羽根の取り付け

関連機器との結線も無事終了しました。毎日、風車は子供たちにさわやかなあいさつをしてくれます。

風車メモ

- 風車は、風速二メートル／秒で回り始めます。
- 風車は、風速五メートル／秒で二十六ボルトを示します。
- 風車で発電された電気は直流に直してバッテリーに蓄えることができます。
- 風車の塔の下のケースの中に、バッテリーが二つ置いてあります。
- 十二ボルト用バッテリー二個を直列につなぎ二十四ボルトが供給できます。
- インバーターによって直流を交流に変換することもできます。
- 家庭用と同じ交流百ボルトも取り出すことができます。
- 現在発電しているかがわかるように風速に応じて三色のランプが点灯します。
- 現在常時使っている電気は、風速計を動かすための十二ボルトです。
- 発電された電気の使いみちについては、子供たちの豊かな発想を生かし、考えていきます。
- 現在、この風車の愛称を子供たちから募集しています。



取り付けもほぼ終わりいよいよ試運転

大谷公園はわれらの学習園だ

子どもたちが、担任の先生と正門、南門から元気よく出ていく姿をよく見かけます。どこへ、何しに行くのでしょう。理科生活科、社会科、図画工作、国語などの学習のためです。行き先は、南公園、上地農園、大谷公園、砂川、奥山田池、勤労福祉会館、子どもの家、市民ホーム等学区の広範囲にわたっています。その中でも、大谷公園はベスト1に位置します。大谷公園でどんな学習を展開しているのか、大きく次の四つになります。

一、学級づくりのための、レクレーションや奉仕活動の場
一、植物、昆虫などの自然観察の場
一、古窯跡（堤ケ入古窯）の見学の場
一、図工の写生並びに材料さがしの場

子どもたちに、学習の感想を聞いてみました。

大やこうえんで、とかげにかまれた。いたいとおもったけど、きもちよかった。（大眉つよし）
女の人と男の人がつりをしていました。（大脇りか）
へんな虫はっけんこの虫なんていうかな（杉浦かえ）

今日、大谷公園に図工で使う木をひろいに行きました。まず、展ぼう台の上で、どこに何が見えるか、どっちが北や東か見ました。それから図工に使う木をさがしました。たくさんありそうな林の中へ入って行きました。三年　松本　彩

ぼくは大谷公園で、アリの観察をしました。さいしょ、木が倒れているみたいなところに、うようよしていました。木をどかしてみたら、アリの大群でした。ほっていくと、大きな巣があり、女王アリも発見しました。　四年　加藤　基樹

今度「よもぎもちを作ろう集会」があるので、大谷公園へ、よもぎの葉っぱなどを取りに行きました。よもぎは、すぐ見つけたけれど、オオバコやヒメジョオンは少したってから見つけました。でも、ハコベだけは見つけることができませんでした。また次に、雑草を取ることがあったら、オオバコ、ハコベ、ヒメジョオンなど全部見つけて持って帰りたいです。　五年　島田　麻美

学区の歴史の勉強で大谷公園の登り窯の跡を調べに行きました。「平安時代のものです」と聞いてびっくりしました。指の跡のついたかけらを見た時、昔も、人が住んでいたんだなあと思いました。　六年　池田　賢弘

子どもたちは、このように校外の学習を楽しみにしており、多くのことを学んでいます。これらの体験の積み重ねによって五感を鍛え、多くの気づき（疑問・発見）をします。また学区を少しずつ理解していきます。

区画整理事業でできあがった上地の学区ですが、自然をいくつか残していただいたことに敬意を表します。学区を良く知り良く活用し、よりよい環境つくりへと育ってくれることを期待しています。

先日も、六年生の子が「お父さんと上地八景を歩いたよ。ちょうど三善寺が焼ける前で、後でびっくりしたよ。」といっておりました。学校と家庭・地域の協力と工夫で子どもは育っていくことをしみじみ感じました。

進みながら考える

一、上地っ子文化祭一歩前進

「ふれあい体験・パワー全開上地っ子」をメインテーマに、六月二十四日、上地っ子文化祭が開催された。午前の音楽鑑賞会昼食時の他学年とのふれあい会食、午後のふれあい体験コーナーオープンなど、子どもたちは、充実した一日を過ごした。

四年生以上の各学級は、それぞれ知恵を絞り、ふれあいと楽しい体験をしてもらおうと、かなり前から準備を進めていた。学区の川で採集した生き物コーナー、漢字クイズ、算数計算競争コーナー、おもしろクイズコーナー、縄文期の文化再現、平安鎌倉時代の文化と生活等、嬉しいことに日頃の学習を発展させたコーナーが数多く見られた。歴史を楽しく体験してもらうために、できごとを劇化したり、建物のモデルを作ったり、かなりの力作が見られた。日本の手作り遊びや交通安全迷路など生活と密着したものもあり、子どものアイディアとエネルギーに感心する。上地っ子の大の人気者であるにわとりのチョウローも一役買って私たちに、心臓の音を聞かせてくれるコーナーもあり、子どもたちは数々の価値ある体験をした。

ここに至るまでの各学級の努力がしのばれる。この開催までの過程こそ大切であり、学級作りに大きくかかわってくる。

・学級テーマ決定 ・コーナーの構想 ・コーナーの準備 ・当日の分担	↕		
	全員で話し合う 全員で準備する 全員で活動する	↕ ↕ ↕	
		グループで話し合う グループで準備する 係ごとに活動する	↕ ↕ ↕
			一人で考える 一人で準備する 一人で活動する

方向が決まり進み出すと、次々とアイディアが出て、コーナーが生き生きとしてきた。

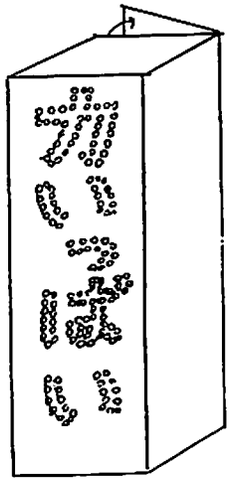
一、校訓「力いっぱい」の電光板を試作する。

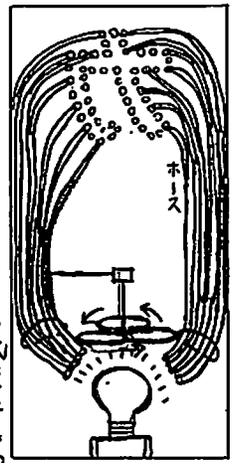
文芸クラブの子が「上地っ子風車」に心を寄せて詩をつくってくれた。

風　車　　四年　小林　弘章

風車は二つのプロペラで
風に向かってぐんぐんまわる
風車はすごい
風が吹くとブンブン音をたてる
ぐるぐるまわって電気をつくる
その電気で
学校中のけい光灯をつけたいな

風車は、上地っ子の新しい友達になってきた。回転灯をまわして、がんばれがんばれと応援している。子どものアイディアを生かして、いろいろ活用したいと思う。なかよし池に水車を回して、池に空気を補給したらという声も出ている。私自身も考えなくてはと、校訓「力いっぱい」の文字が輝く電光板を試作してみた。化粧板に、ドリルで小さな穴をあける。全体をボックスにして下方に電球を取りつけたものである。『力』の部分には、ビニールホースを連結して、その中にグラスファイバーを通すと、チカッと光る。作っているうちに次々と考えが出て、改良の方向が見えてくることに気がつく。





燃えろ上地っ子　――――自分のために、みんなのために

一、男子バレー部全国大会出場権獲得

去る七月四日、ライオンカップバレーボール県大会において男子バレー部（上地小クラブ）が優勝を果たしました。男子バレー部の全国大会出場は三年ぶり二度目の快挙であります。当日の子どもたちの活躍はすばらしく、それに加えて、団長さんをはじめ保護者の皆さんの応援が見事で感心しました。心を一つにした声援によって選手のみんなが気持ちよく力を出し切ることができたと思います。監督、コーチ、マネージャーの皆さんのご苦労とご指導に敬意と感謝を申し上げます。八月十日からの全国大会には、学区の皆さんのご支援をいただき愛知の代表として「力いっぱい」の試合ができることを願っています。

一、岡崎市小学校球技大会・水泳大会に期待

七月二十一日から二十三日まで、岡崎市小学校球技大会、そして二十八日には水泳大会が開催されます。

十七日には、全校児童で出場選手を励ます選手激励会を行いました。六年生にとっては最後の大会です。この機会に自分を高めてほしいものです。各部のキャプテンは、次のように力強く抱負を述べました。

バレー部（男子）　今まで県大会に向けて練習してきました。今は、市内大会にむけて練習しています。市内大会では九人制で六人制の県大会とはちょっとルールが違います。でも、ぼくはチームワークがよければうまくいくと思います。去年取れなかった優勝旗を持ち帰るよう頑張ります。

（松田　吉史）

バレー部（女子）　今年の西三大会では負けてしまったので、夏の市内大会（九人制）に向けて練習を頑張っています。私たちのチームは、サーブレシーブが弱いので、そこのところを努力しています。ボールを進める方向を考えて、自分からとろうという気持ちが大切です。九人制では、しっかりやって絶対優勝したいです。

（吉本　奈月）

バスケット部（女子）　私たちの努力していることは、もちろん、夏の市の大会にむけて集中することです。あと一つがんばっていることは、励ましたり、ほめたりする声を出し合っていることです。去年は準々決勝で負けましたが、今年はそれ以上の成績で、優勝に向かって頑張っています。

（埋水尾亜依子）

サッカー部　サッカー部は小田先生、岩井先生のもとで厳しい練習に耐え、毎日必至で頑張ってきました。雨練の日も、六時までしっかりやりました。僕たちの最大の目標は、優勝だけです。一昨年が準決勝で敗れ、昨年は、決勝までいきましたが惜しくも敗れ、とて悔しい思いをしました。今年こそは、上地小学校に優勝旗を持ってきたいです。

（尾上　佳宏）

ソフト部　夏の大会に優勝するために毎日練習に励んでいます。練習ではバッティング練習と守備練習を同じくらいの時間を使っています。去年は一回戦で負けてしまったので今年は頑張ります。一回戦の相手が、練習試合で負けている小豆坂小なので、そこのチームに勝って勢いをつけて、そのまま決勝戦までいって優勝したいです。

（安藤　光範）

水泳部　おととしくらいから、水泳部全体の成績がぐんぐん良くなっています。今年は、目標を優勝において、個人ではみんなベストタイムを出して、良い成績を残すことです。そして、リレー（二〇〇メートル・四名）では、三位までに入れるよう頑張りたいです。

（男子・加藤　峻也、女子・畔柳　麻衣子）

毎日の練習を見ていますと、声を出し合い規律ある態度で汗を流しています。目標に向い、技をみがき、苦しさに耐えることなどは、子どもたちには価値のある体験です。自分の力を発揮し、心と体を鍛えてくれることを願っています。

自分のよさを生かして

一、それぞれの思い出を糧に

二学期の始業式、みんな元気に登校し、それぞれの夏休みの思い出を胸にあいさつを交わしました。日誌、一人一研究等個性が出ていました。家族の協力も伺え、子どもの自立への支援も感じました。

・プール開放、学区巡視、夏祭り等ＰＴＡの皆さんの努力に感謝。

・市球技大会、水泳大会、子どもたちの活躍は目覚ましく、校訓「力いっぱい」を発揮。バレー男優勝、サッカー第二位、ソフト第三位、水泳第四位

・統計グラフコンクール市長賞受賞、緑化ポスター・習字に多数入選。文化面の頑張りあり。

・全国大会ベスト８に輝く。　男子バレーは、県代表として八月十日より東京体育館、町田市総合体育館、駒沢屋内球技場にて熱戦。見事ベスト８に輝く。予選に続くトーナメント四試合、その一戦一戦に「力いっぱい」。午前四時発の応援バス三日間往復運転、学区のみなさんの期待に応えた。特に、トーナメント二試合目、対陵ケ岡（京都）との戦いは、第一セット６：１５で落とし第二セット監督の適切な助言と選手の底力で１５：６でタイにし、第三セット、一進一退の中、１５：１０で勝ち抜く。選手、監督、応援隊が一体となった戦いに感激。学区の皆さんの物心両面でのご支援に感謝。

・学区親子夏祭り。総代会、ＰＴＡ、社教諸団体の企画・準備・運営、その緻密さ、行動力に目を見張り、どこかで貢献をと、私も風力発電による電光板を灯し、カラオケ大会に出場。三千人以上の参加の夏祭り、学区民が心をひとつにして大成功。

九月に入り、市民陸上で走り高跳び（中島翼君）女子百米（永田千晶さん）優勝。西三バレー九人制男優勝、六人制男子第

二位、女子第二位、新しいチームでの活躍がありました。統計グラフコンクール県大会で見事金賞を中島由紀子さん（二年）木村智佳子さん、中原真理さん（三年）が射止めました。約二千点の中から選ばれたとのこと、大変嬉しく思います。

二、学校五日制アンケート（その２）より

昨年九月から月一回の休業日が設けられ、ちょうど一年が過ぎました。二年と五年の一学級でアンケート調査をしました。

（一）九月十一日（土）は誰と過ごしましたか。

（１）一人で（二年０％、五年三％）（２）友達と（二年四七％、五年二八％）（３）家族と（二年五０％、五年五八％）

（二）何をして過ごしましたか。（二つ選択）

（１）家・家の近くで遊んだ　（二年八二％、五年三六％）　（２）家の手伝い　（二年一五％、五年二八％）

（３）買い物　（二年一七％、五年二四％）　（４）家で勉強　（二年一七％、五年　八％）

（５）旅行・ハイキング・見学（二年一二％、五年一一％）　（６）ゆっくり休む（二年　五％、五年　八％）

（４）その他（二年二％、五年四％）

（三）過ごし方を決めたのは誰ですか。

（１）自分で　（二年五六％、五年六四％）　（２）人に勧められて自分で（二年一二％、五年一九％）

（３）他の人が決めた（二年二三％、五年　八％）　（４）その他　（二年一二％、五年　八％）

以上は、アンケートの一部ですが（１）誰とについては、二年生が「一人で」（昨年六％）と「家族で」（昨年七０％）が減って、「友達と」（昨年一九％）が増加しました。（２）何をについては、二年生で、家の近くで遊ぶ（昨年四七％）が増え、五年生では家の手伝い（昨年一五％）が増加しました。家庭での自主性が少しずつ育っているように思います。学校においても、子ども一人ひとりが自分の問題を持ち、自分の考える方法で学習を深める場を設けて、学習においても、学級活動においても自主性が伸びるよう一層努力を払いたいと思っています。

〃さあ、読書月間、心豊かに〃

「今日は、楽しい読書集会、頑張ってくれている図書委員会のみなさんに拍手をおくりましょう」。集会委員のあいさつで読書集会が始まります。読書紹介、読書クイズ、図書館利用の仕方など、図書委員の児童が、劇や語りなど工夫をこらし、低学年の児童にもよく分かる、楽しい集会を構成しています。登場する委員さんも、その本の内容に合わせて服装を考えたり、ＯＨＰで場面の大写しするなど、力いっぱいの努力の様子が伺えました。これは十月三十日の読書集会の様子です。

読書指導を学校教育の大きな柱として三年、本年も先生方の数々の実践によって、子どもたちが少しずつ本に親しみ、沢山の本を読むようになってきました。平成五年度になって取り組んだことは、読書感想文集の発行、すいせん図書の見直し、図書館を活用しての授業の実践、各学級の読書指導実践、読書タイムを設置しての読書の習慣化、視聴覚センターの設置（学習ビデオ、資料が自由に見られる）、そして、図書館そのものが子どもにとって魅力ある物にするための環境整備に全職員が取り組んでくれました。

うれしいことに、本が好きになっていく子が増えています。毎日の学習においても、教科書だけでなく、図書館の本を利用する子が多くなってきました。高学年での調べ学習にも大いに生きています。学級でのお互いの読書紹介を通して、本の内容と共に、感じたこと、思ったことなどを素直に表現できるようにもなっています。昨年三年生の川村沙織さんは岡崎市読書感想文で市長賞を受けました。読書と生活が一つになっていましたので、ここに、川村沙織さんの文を紹介します。

あめんぼがとんだ

わたしは、あめんぼがとぶのを見たことがあります。

家の近くにあった大きな水たまりに、あめんぼが、二、三びきいました。わたしは、こんな水たまりまで、どうや

って来たんだろうと、ふしぎに思いました。くつで、水たまりをチャブチャブゆらしていると、あめんぼが一びき、スッときれいに水たまりから、足の先を空中に上げて、羽でとんで行きました。わたしは、本当にびっくりしてしまいました。そばにいたお姉ちゃんに、あめんぼがとんだことを言おうとしても、

「あっ。」

としか声が出ませんでした。水たまりにのこっているあめんぼに、ふうっと、息をかけると、となりの水たまりにとびうつって、そのうち空へとんで行きました。

「あめんぼがとんだ。」

と、あめんぼの方を指さしながら、しばらくぼうっとしてしまいました。わたしにとって重大な発見でした。お姉ちゃんにそのことを言ったけれど、あまり感げきしてくれないで、

「あめんぼなの。何かの虫でしょ。」

と言われてしまいました。だから、この本の題名を読んだ時、

「そうなんだよ。本当なんだよ。」

とみんなに教えたい気分でした。ちょっととくいになってこの本を読み始めました。

ありを水たまりにうかばせてみると、あめんぼのようにはすいすいと上手に足を使って泳がずに、めちゃくちゃに手足をもがいて波もんをたてて、そのうち地面へ上がりました。水たまりにうかばせる前よりのうのうと足がおそくなり、体にどろがついていました。あめんぼは、水上スキーをつけてるみたいに上手なのになあ。体が軽くて、長い足がぬれにくくなっているからだそうです。

わたしは、あめんぼが肉食ではえやあぶを食べると知って、びっくりしました。そんなふうには見えなかったから

です。

あめんぼは、いつも周りのけしきを見ていて、自分のいる所をちゃんと知っている、ということにもおどろきました。せんめんきの実けんを、わたしもやってみようと思って、さっそく近くの小川へあめんぼをさがしに行きました。

いた、いた。いっぱいあめんぼがいました。二ひきバケツに入れて家へ持って帰りました。青いたらいにあめんぼを放して、けしきのはっきりわかる本を周りに立てました。ちょっとしてから、そっと本を動かすと、あめんぼは、ちょっと考えてからくるっと回りました。

「すごいなあ。これだとぜったいまいごにならないね。」

お母さんが、一すんの虫にも五分のたましいという言葉を教えてくれました。どんな小さな虫にもいのちがある、一生けんめい生きている。わたしは、あめんぼをもとの川にちゃんともどしてあげました。

（あめんぼがとんだ・新日本出版社）

自分の体験に基づいた素直な感想がかかれています。周囲の自然や生き物にやさしい目を向け、小さなできごとにも感動する心が素晴らしいと思います。この本と出会ったタイミングの良さも沙織さんの心を引きつけ、生き物の生態の不思議に触れ自然を大切にする気持ちへと広がっていきます。

子供の成長にとって読書指導、図書館利用指導は重要な位置を占めています。ＰＴＡのご支援もあって、現在蔵書数は、九一九九冊に達しています。読書指導は生涯学習の基礎を培う上でも大切との認識にたって、より充実した実践を進めたいと思っています。

〃修学旅行お帰りなさい―五年生より〃

六年生にとって最大の楽しみである修学旅行が十一月二十五・二十六日に行われた。岡崎市小学校連合修学旅行として四校ずつＪＲ岡崎駅を出発する。旅行先は例年奈良、京都であるが、見学地は各校に任されている。一日目は平等院と興福寺、東大寺から春日大社に至る奈良公園半周で、鹿と親しめるコースである。二日目は、清水寺、三十三間堂、二条城、東映映画村、金閣寺そして銀閣寺の六か所である。これらは、六年生としての歴史学習に登場する大切な場所である。

楽しみにしていることは

・金閣寺の美しさってどんなかな、一度見てみたいと思います。

・大仏さんって、どのくらい大きいのかな・・・。

・清水寺で頭の良くなる水があると聞いているから、飲んでみたい。

・みんな一緒に寝ること。それと新京極でおみやげを買うこと。

新幹線の中でちょっと尋ねてみた。素直な答えが返ってきた。

最近、子供たちは家族で旅に出る。新幹線には、すでに何度も乗っている子供たちも多いが、二割の子供は初めてという。

そして、いずれも級友と一緒というところが楽しいのである。

名古屋までの特別列車三号車には矢作西小学校の子供たちも乗っていた。子供たちは、お互いにはずかしそうにあいさつを交わしていたが、お互いすぐに近づいていって仲良しになってしまう。ほのぼのとした交流風景に心温まる思いがした。これらも担任のちょっとした配慮があってのことであろうと思った。

心に残った事は

・東大寺の大仏さん、堂々とした座り方、落ち着いたあの顔、そして大きさにびっくりしました。

・金閣寺は金ぱくがいっぱいはってあり、太陽の光りに照らされてとても輝いていました。圧倒されてしまいました。
・二条城のうぐいすばりの廊下は、本当にキュッキュッと鳴いた。敵が入らないよう工夫したとはびっくりしました。
・清水寺の舞台からは、ながめがとてもきれいで、また、長生きする水が飲めました。
・目の前に大仏を見ると、想像の倍もある大きさに驚き昔の人の努力がとても大きかったんだと思いました。
・三十三間堂の観音様の数にまずびっくりした。また一つ一つがちがうからすごいと思った。
・金閣寺もすばらしかったけど、なんといっても銀閣寺の庭がきれいでした。

一番楽しかったことは

・旅館では、みんなでいろいろ話し合ったり食事をして最高に楽しかった。帰りの電車では少しさみしくなってきました。
・夜、新京極で班行動しておみやげを買いました。強引に買わそうとしたおばあさんもいておもしろかった。
・奈良公園で、すぐ前で鹿を見たり、さわったり、えさをあげました。しかがおじぎをしました。

子供たちは夢を一段とふくらませて一つ一つの見学地に足を運ぶ、「大仏さまでっかいなあ、みんな苦労して作っただろうな。」「ワアーきれい。」どっと声の上がる金閣寺。日本の歴史と文化のほんの一こまに接するのであるが、感覚的に捉えていく。やがて将来深い理解へとつながっていくことであろうと期待する。子供にとっては小学校最高のイベントである。数十年少しずつは改善されているものの、今後、向上を目指して検討していきたい。

宿泊先の職員から、行儀が良いと褒められたこと、ふろ場で自主的に桶を整頓して出てきたこと。新任のガイドさんを励ましながら楽しみ合ったバス車内のこと、そして、修学旅行から帰った翌日、六年生の各教室に「お帰りなさい」と黒板いっぱいに書いてくれた五年生がいたこと。どれ一つとっても嬉しいことであった。旅行記もきっと良いものができるであろう。

学級文化の創造にむけて

ふれあい牧場でチャボの卵が孵ったのは初夏の頃であった。親のチャボが小屋から外に出ると、ひな四羽が親のあとを追ってくる。右に親が動けば、ひなも右へ、親が左へ動けば、ひなも左へ、見事に四羽が行動を共にする。。その動きの素早いこと、親がえさをつつくと、ひなもつつく。えさがなくても同じ行動をとっている。棚のすき間から出ようと思えば出られるが出ない。ゆったり動く親鳥とちょっとおくれて、素早く動く四羽の姿にほほえましさを感ずる。ここに教育の原点を見た思いがある。

その時のひなは現在大きくなった。生まれて二週間くらいから、四年一組、一年一組の教室で育てている。身近にいて、観察でき、チャボは学級の一員になりきっている。

「校長先生、見て見て、こう、手の上に乗るでしょう。」

「頭の上でも平気だよ。」

どの子も楽しそうに、仲良しであることを示してくれる。

四年一組が続けている活動のテーマは「生き物博士になろう」であり、一年一組では「チャボと遊ぼう」である。生き物とふれあい、記録をつけたり、他の生き物を図書で調べることによって、一人ひとりが高まり、学級としても一つの文化を創っていく。

このように、一人ひとりの存在感があって、自主的、創造的な活動ができる場を設定していくことが、いきいきとした子供の育成につながる。担任の先生方は、それぞれ、子供と話し合いながら長期的な学級の活動に取り組んでいる。

ここで、高学年が取り組んでいる学級文化活動の内容を少し紹介しましょう。

・上地学区探訪―上地っ子文化祭では、学校や学区（上地八景）を調べ、スゴロクゲームにした。学校や学区の石碑の拓本

をとったり、その石碑を調べている。　（五の一）

・話し合い、練り合い、みがき合う学級ー授業はもちろん、クラスの活動において、全員の考えをもとに高め合う話し合い　（五の二）

・奉仕活動ー砂川、大谷公園、校内の清掃活動と、リサイクルのためのトレイ集め　（五の三）

・お話パネル（パネルシアター）の作成ーパネルをグループごとに作成し、発表会を持つ　（五の四）

・多くの人々、いろいろな文化との交流ー一年一組との交流給食、交流オリエンテーリング、縄文人との交流等（六の一）

・学区の生き物研究ー学区の鳥、魚、虫、植物について調査し、学区の生物についてまとめる。　（六の二）

・リサイクル活動ー地球環境問題を調べる。再生紙作り、再生紙を使ってのポスター、新聞、はがき作り。他学年に再生紙作りを体験してもらう。　（六の三）

・好きな作家の本を読もうー同一作家の本を図書館で調べ、紹介の会を持ち、読んで感想発表の会を持つ。　（六の四）

・生活遊びー百人一首リーグ戦、年間通して百人一首を覚えながらゲームをする。小学生新聞を読む。　（六の五）

十一月のある日、六年二組の高市さんと内田さんが校長室へはいってきて、「校長先生、今時間の都合がつきますか」と突然訪ねてきた。どうしたのかと問い返すと、「今から、大谷公園の森でリスを見た人がいるか取材に行きたいのですが、ついてきてくれませんか」と言う。ちょうど都合がついたので三時半から約一時間大谷公園近くで、六軒の家を訪問させていただいた。子供たちの主体的な取り組みに、どの家の方も親切に取材に応じてくれて、子供たちは多くのことを学んでいった。リスについての情報は少なかったが、サルやハクビシンについて情報を得ることができた。私にとっても学区のみなさんとふれあいができて、よい経験であった。

イヌ年を迎えて

――　五感を生かして、力いっぱい　――

明けましておめでとうございます。

昨年は、学校教育、社会教育において子供たちが大変お世話になりありがとうございました。

今年はイヌ年、イヌといえば、「犬も歩けば棒に当たる」という言葉を思い出します。これには、二通りの解釈がありました。一つは、何かをやろうとすると、必ず困難や危険がともないますということであり、二つ目の解釈は、能力が余りなくても、こつこつ努力を続ければ、きっと良い結果にたどりつきますという意味であります。一方が、あまり手や口を出し過ぎるなということで、他方が、じっとしているよりまず行動を起こすのがよいという意味でありましょう。私は、この二つを重ね合わせ、「何かをやりぬこうとすると、困難は必ずあるけれども、努力を続ければ、きっと良いことに出会う。」と解釈して本年も頑張りたいと考えています。（上地学区新年交礼会より）

本年はイヌ年、「犬も歩けば棒に当たる」如く、子供たちが、自ら問題を持ち、体験によって解決していく場を多く構成したい。社会の変動の激しい現在、教育としては、時流に流されることなく、学ぶ楽しさ、協力してなし遂げる喜びが体得できるよう、学級・学校文化の創造に向けて頑張っていきたい。（東海愛知新聞年頭あいさつより）

みなさん、明けましておめでとうございます。

それぞれの楽しい冬休みを過ごしたことと思います。冬休みに入ってから事故の報告はひとつもなかったので、しっかりした生活が送れたことと嬉しく思います。心に残ったことや、手伝いで頑張ったことを担任の先生にお話しして下さい。

さて、今年はイヌ年です。犬のすばらしいところを見習っていきたいです。すばらしいところはたくさんありますが、三つ上げてみましょう。

一つ目は、動物の中で、一番人間と仲良しである。

二つ目は、物覚えがとても良いことです。集中力と記憶力があるということです。

三つ目は、においをかぎ分ける力が優れていることです。人間の一万倍もあるそうです。また、音を聞き分ける力も良くてこれも人間の四・五倍もあるのです。

みんなも、この良さを見習って、仲よく、目、耳、鼻など十分働かせて、体全体で勉強していきましょう。

さて、今日から三学期です。一年のうちで最後の大切な学期です。書き初め大会、学芸会、マラソン大会を通して、一人ひとりが「力いっぱい」を発揮して、学級として、「最高にまとまったなあ」と言えるようにして下さい。特に、六年生の皆さんは、小学校最後の三か月です。代表委員会、専門委員会、通学団の世話、あいさつ運動などについて立派に手本を示して下さい。また、五年生から一年生みなさんは、六年生の活躍ぶりを良く見習って、これまた、立派に引き継ぎができるようにしてほしいと思います。

今年の自分の目標を心の中にちゃんと持って、一歩一歩進みましょう。校長先生も目標があります。前から要望のあった「なかよし池に水車を回そう」です。風力発電機「びゅー太君」の電気で、水車を回そうと思います。第一号機をまず作りますから、皆さんのアイデアで改良していきたいと思います。お互いに頑張りましょう。（三学期始業式より）

ＰＴＡサークル活動のひとつに〃子供の生活を語る会〃があります。月一回会員六名の方と学区・学校・家庭における子供の生活について情報交換をしています。一度学校における普段の生活見てもらうことにしました。その様子をここで紹介します。

心のままの姿を撮る

ＰＴＡサークル〃生活を語る会〃

私たちは、校長先生と共に〃子供の生活について〃月に一度、楽しく語らう会を行っています。十一月のある日、会員で子供たちの姿を撮ろうと、片手に写真機を持ち学校の中を廻りました。

いつも見る子供たちは、授業参観、運動会、学芸会とひとつの枠のなかで見ることがほとんどです。参観日などは子供のみならず、先生も親もちょっと緊張感があり、普段と違って皆優等生です。しかし、私たちが見た一日の学校は放課時間、自主学習（図書館での）、給食など、とりわけ子供たちのそのままの姿が現れている時でした。

子供たちは、心のままの姿で、

「おばさん、何をしているの。」

「誰のおかあさん。」

カメラの前では、ちょっとかっこうをつけて・・・・Ｖサイン

給食時間になると低学年の白衣をつけた当番さんが給食室へ食器を取りに行きます。けっこう重いおかず入れですが、子供たちだけで運んでいきます。小さな体に大きなおかず入れ、何とも可愛らしい後ろ姿です。小さくても、自分たちでできるんですね。でも時折、失敗もあり、おかずを全部、床にこぼしてしまうこともあるそうです。こんな時は大変。でも大丈夫、学校中のクラスからお助けマンが来て、おかず入れの中は元どおり。

全校協力体制ができているのですね。

いよいよ食べる時、子供たちは手をひざに置きながらも「もぞもぞ、もぞもぞ」と早く食べたそう。

「いただきます。」

どの子も一斉に牛乳に手が行きます。そして一本を一気に飲んでしまう子もいます。

「なるほど」これは低学年の先生の知恵でしょうか。牛乳が後になると残してしまうことがあるのでしょう。それにしても、おしゃべりをしながえら、口いっぱいほおばって、楽しそう。そんな幸せそうな子供の様子を見て、低学年の子を持つ、会のお母さんも一安心をしました。普段の参観日では見ることのできない姿で「こんな参観日もあるといいわね」と会の方たちと話をしたことです。

その日は暖かく、太陽が学校を包んでいるようでした。木々は空にむけて、その姿をアピールしているかのように美しくのびのびしていました。

屋外へ出てみると、放課の運動場はそれは壮観でした。学校中の一年から六年までの男の子が全員いるのではないかと思われるほどでした。今のJリーグブームのためでしょうか運動場のすみからすみまで、サッカーのグループができ、入り混じって走り回っているのです。一六〇センチもあるような六年生がシュートをしている横で、ちっちゃな男の子がコロコロとボールをけり合っています。たぶん一年生でしょう。そのグループの様子を見ると、大きなシュートが得意な子、小回りがきき機敏に動き回る子、走るのが必死でなかなかボールに近づけない子といろいろです。しかし、見て共通なことはどの子も自分の意志でひとつのボールを目指してその子なりの力を出していることです。放課ならではの本当に気持ちの良い姿でした。

その中には、ゲームのルールがあり、友達との接し方、場面の対応の仕方など、子供が身につけてているものは多

いようです。これらは私たちの眼になかなか見えてきません。

私たちは子供をほめる時、表面に現れたことを重視し評価しがちです。形には現れないこと、言葉に出せないことの中にも大切なものがあることを強く感じました。

この日は子供の生活を写真に撮ることが目的でしたが、その場の雰囲気を写真におさめることはなかなか難しいことでした。

特に、スポーツをしている場面は、シャッターチャンスを捉えることはできません。しかし、実際の眼で、子供の姿を確かに見て自分の心の中に撮ることができました。

いつもなら見過ごしてしまうことでも、じっくり見ることによって色々なことが見えてきたような気がします。

この会の主旨からして意義のある一日でした。（文責K・K）

子供の生活場面はさまざまです。一面だけで子供の姿を捉えることはできません。確かな眼と広い心で子供たちと接していきたいと思います。

三、教室の窓

円光山寂静寺

１４００年の昔、当地を巡行した聖徳太子が阿弥陀如来像を安置されたのが契機となって建立された。境内は車社会から隔絶された古都の雰囲気をただよわせ、石段と山門を通して見える本堂の風格は心に迫る。

一年生との交流から

六年生担任　鈴木　尚子

「はあ、つ・か・れ・た！」

「一年生の子って、なんであんなに元気がいいのお。」

「ぼくたちもあんなに騒がしかったかなあ。」

毎朝、一年生の教室から帰って来た6年生の間で、こんな会話が飛び交っています。

というのも6年生の子供たちは、入学式の明くる日から、毎朝、一年生の教室へ行ってお世話をしています。一年生の子が早く学校に慣れ、楽しく安全に過ごせるようにと、六年生の子供が開校以来続けている自主的な活動です。今年度、六年一組はお世話をするために一年一組へ行っています。最上級生として上地小学校をリードしなければならない、一年生の子供たちをしっかりとお世話をしなければならない、という意欲はあるのですが、なかなか思うように一年生の子たちが動いてくれないのが現実のようです。毎日、書いてくる「一日を振り返って」の日記の中にも、たいへんな様子がたくさん書いてあり、なかなか細かい気配りをしているようです。（うーむ、苦労をしているなあ。でも、毎年やってきたことだから、がんばれ！）と心の中で応援してきました。

ところが、一日一日とお世話を重ねていくたびに、一年生の子供たちとの心も通い合ってきたのか、教室に戻ってくる子供たちの顔の表情にもゆとりと笑顔が見られるようになりました。そのころから、子供たちの日記にも変化が表れ始めてきました。

こんな内容の日記が多くなりました。

・先週、一年一組へ行ってお世話をしました。校歌を教えてあげたけど、最初はあまり歌ってくれなかったけれど、だんだん歌ってくれるようになり、うれしくなりました。途中で席をたって遊んでいる子がいるので、注意をしたり、面倒を見ています。（天野　真也）

・一年生の教室に入ると、とっても小さな机とイスがあり、なつかしい気持ちになります。この頃、校歌を教えている時は、とっても元気よく歌ってくれるようになりました。その顔を見ていると、自分にも妹や弟がいるみたいに思えてとてもかわいくなりました。（鶴見　有香）

・ぼくが一年生の時には六年生がお世話をしてくれました。今度は、ぼくたちがめんどうを見てあげる番です。一年生はかわいいので、いろいろなことを教えてあげたいです。（松井　文人）

・一年生のおもりは大変です。何を言っているのかよくわからない子もいるし、勝手にどこかへ行ってしまう子もいるので目を離すこともできません。でも、けがをしないように一人一人を見守ってあげたいと思います。（松下　昴）

ある日の授業後、職員室で日記に朱書きを入れていると、一年一組担任の岡本きみえ先生がにっこりと、

6年　平沢広大

「六年生の子がお世話に来てくれるので、ほんとうに助かってます。」

といいました。その言葉を耳にして、（六年生の子供たちが悪戦苦闘しながら懸命にお世話をしていることが伝わっているな。）と嬉しくなり、翌日、学級のみんなに伝えたところ、みんなの瞳が輝いてきました。

一年生のお世話して一か月が過ぎようとしています。今、六年一組の学級会の議題に『交流給食』の話題が持ち上がり、学級会を使って計画を立てることになりました。

学級代表の畔柳麻衣子さんの日記には、こう書いてありました。

私たち六年一組では、今、交流給食の計画を立てています。私は、一年生にこの上地小学校を大好きになってもらうためにいろいろな面から考えて、意見を出しました。きっと、楽しい交流給食になって、一年生の子たちも喜んでくれると思っています。私は、その日が来るのが少しずつ待ち遠しくなってきました。

最後に、一年生の子に聞いてみました。

・あそんでくれるのが　たのしい。（かもはら　たかひろ）　・うたをうたうのが　たのしい。（こばやし　けいこ）

・こうかを　おしえてくれるので　うれしい。（すぎうら　あや）　・そとで　あそぶのが　たのしい。（なかじま　りな）

・ほんを　よんでくれるのが　たのしい。（まつおか　あきこ）

こうした子供たちの意欲的な取り組みで、最高学年の良きスタートを切ることができた。上地小学校の良き伝統を受け継ぎまた、新しいことへ挑戦する気持ちも忘れずにこれからの一年間を歩んでいきたいと思っています。

観天望気

――自分の力で天気を予想――

五年担任　小田　英宣

五年生の理科の学習の中に、『天気の変化』の単元がある。一日の気温の変化、太陽高度、雲、風と天気の関わりなどを学習していく。その中でも、子供たちが一番興味を持って取り組むのが、天気の予想である。これからの天気を自分の力で当てることができたら、どんなに楽しくて、便利だろう。

今回、この天気の予想を観天望気を用いて行うことにした。

『観天望気』、あまり聞き慣れない言葉である。実際、授業を行うまでは子供たちの誰ひとりとしてこの言葉を知っている者はいなかった。『観天望気』とは空・雲風・生物などの身近な自然の様子から天気を予想するものである。先人たちが、生活の中から見つけ出し、私たちに残しいってくれた貴重な知恵である。

そこでまず初めに、この観天望気について図書室で調べることにした。想像していた以上に観天望気には、たくさんの種類があり、子供たちも驚いていた。

「つばめが低くとんだら雨だって。」

「あ、それ聞いたことがあるよ。」

子どもたちが調べた観天望気

- 猫が顔を洗うと雨
- つばめが低く飛んだら雨
- カエルがまいたら雨
- ありが行列をしていると雨
- 池の魚がパクパクしていると雨
- ご飯粒が茶わんによくつくと晴れ
- 煙が西にかたむくと雨
- 蒸し暑い（湿度が高い）と雨
- 朝の気温が高いと雨
- 夕焼けが出ると晴れ
- 雲の種類で天気を当てる
- 太陽や月にかさがかかると雨
- 星がまたたくと晴れ

「ご飯粒が茶わんによくつくと晴れるって書いてあるよ。本当かな？調べてみたいな。」

「この本、観天望気のことがたくさんのっているよ。」

「本当だ。二十個くらい書いてあるね。」

調べていくうちに、図書室の中は活気に満ちた声でいっぱいになってきた。また、図書室で調べ学習をするとともに、家庭でも観天望気を話題に話をするようにさせた。身近な話題だけに楽しく、話がしやすかったようだ。

観天望気のことをお母さんに聞いてみました。「小ばえがとぶと明日は雨」「雨がえるがなくと雨」など、教えてもらいました。私は、理科があまり好きではありません。でも天気の授業は、どうしてかわからないけどけっこう好きです。私が調べている観天望気のことをしっかりまとめて、みんなの前で発表してみたいです。

（浅野　麻衣）

そして、実際に子供たち自身の力による、天気の予想が始まった。観測初日から子供たちの反応は、たいへんよく、

「先生、今日の天気、ぼくが予想したとおりだったよ。」

「私も当たっていたよ。」

「昨日は夕焼けが出ていたし、星もまたたいていたから晴れると思ったんだ。」

と、子供たちの口から天気の話が出てきた。そして一週間の観測を通し、子供たちの目は、身の回りの自然に向けられるようになってきた。

六日間の観測が終わり、自分の調べてきたことをB紙にまとめた。そして、みんなの前で結果を発表する時がきた。意欲的に観測を行ってきた子供たちは、ちょうどこの日が、研究授業だったということもあり、自分たちの調べてきた内容を発表し

たくてしかたがない様子だった。授業を終えた後、発表できなかった子供たちから、

「先生、どうして私をあててくれなかったの？渡し、みんなの前で発表したかったのに。」

「私もあててほしかったな。だってB紙にもきれいにまとめたし、発表の練習もしっかりやったんだよ。」

と何人もの子供たちに言われた時、子供たちが、この観天望気による天気の予想をどれほど真剣に行ってきたか、あらためて思い知らされた。

また、ほとんどの子供たちが、六日間予想したうちの四日間ほど当たっていた。子供たちは観天望気が意外に良く当たる個とへの驚きと同時に、友達が調べた観天望気に興味を示していた。自分が調べてきたものとは別の方法で調べてみたいという意欲を持つ子供多くいた。

今日の発表を聞いて、みんながいろいろな方法で工夫をしながら調べていることがわかりました。ぼくは、『むし暑いと次の日は雨』という観天望気で天気を予想しました。そして、天気と湿度が何か関係があることがわかりました。観天望気を使って天気を予想する個とは、とてもおもしろかったので、今日のみんなの発表を参考にして、またいつかやってみたいと思います。

（曽根　幸裕）

私は、池の魚で天気を予想しました。この天気の勉強で、他にもたくさんの観天望気があることを知りました。また方法を変えて、明日の天気を調べてみたいです。

（野々山　すなお）

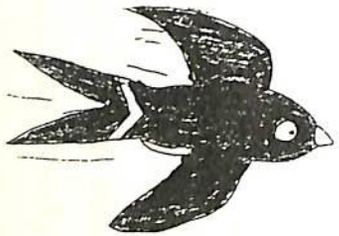
ぼくは、ありの行列について調べました。二回当たって、四回はずれました。ぼくは、一回もありの行列を見ることができませんでした。でも、渡辺君は一回行列を見たそうです。とてもうらやましく思いました。みんなとてもがんばって調べていたので、今度調べる時は、ぼくも負けないようにがんばってやりたいです。

（林　賢亮）

ぼくは、今日の天気は当たらなかった。みんなの研究の発表を聞いて、観天望気にはたくさんの種類があることや、それぞれが工夫して観察してきたことが良くわかった。また、みんなテレビでやっている天気予報と同じくらい当たっていた。これからも、いろいろな方法で天気を予想したい。

（磯山　理）

一週間の観測を終え、今また再び観測を始めることになった。今度は、クラスで理科の作品展に出品するため、四週間の観測を行うことになった。初めに行った観天望気をもう一度やる子もいれば、違う観天望気で天気の予想をする子もいる。この四週間の観測の中で、身の回りの自然にさらに親しみ、今まであまり気にとめなかったことにも目を向けることができるようになってくれればと思う。そして、観天望気が子供たちの生活の中に生かされるようになることを願っている。



久保田　雅之

グリンピースランド

～ 自然っていいな ～

四年二組　岩井　政美

六月二十四日、上地小の大イベント、「上地っ子文化祭」が幕を開けた。

午前中の音楽鑑賞会、兄弟学級との合同昼食を経て、待ちに待った各クラスのコーナーめぐり開始の時間が刻々と迫ってきた。

「先生、お客さん、何人来るかな。」

「お客さん、来てくれるかな。」

「大丈夫だって、きっと来てくれるよ。ねっ、先生。」

文化祭で心はドキドキし、うれしい反面、自分たちでつくったコーナーがどうだろうかといささか心配なようだ。

「一時だー。よし、いくぞ。」

と、子供たちの大合唱。様々な思いの中でコーナーめぐりが始まった。

四年生の子供たちにとって、今年の「上地っ子文化祭」は今までとは違っている。それは楽しませてもらっていた低学年から、上地っ子たちを楽しませる高学年の仲間入りをし、クラスごとにコーナーを設けなければならない。四年生になって二か月、どれだけ自分たちは大きくなったのか、どれだけ自分たちには力がついたのか、それを今、見せるときがきたのである。

文化祭についての第一回学級会、「こんなコーナーはどうかな。」と話し合いが始まった。子供たちは期待に満ちあふれ、

とても輝いていた。

そして熱の入った話し合いが進められ、クラステーマが「自然っていいな」、教室名が「グリンピースランド」に決定した。グループごとの発表は国語の「草花遊び」、理科の「植物や昆虫」の単元をもとに作成することになり、教室の準備も始まったのである。教室の中に山や川、野原をつくり、だんだん教室が「自然」へと変化していった。

草集めをしました。たくさん取れるまで、雨にぬれてもがんばりました。ほかにもダンボールで木をつくったりしました。家に帰った時は、ちょっと『クター』となりました。

（山本　幸生）

草や石は本物を置くと言うことで、早く四の二の教室がグリンピースランドになってほしいと思いました。そのためにも準備をいっしょうけんめいにしました。

（酒井　美和）

山や川をつくるときはすごかった。石を大量に持ってきたり、水色のゴミぶくろを使って川を作ったり、つくえなどを積んで、ダンボールをはりつけ、緑色にぬったB紙をはったりした。ちらっと見ると川に本物の水がながれているように見えた。

（鈴木　匡）

ヒマワリのことを調べて書きました。はじめに『こんなでっかいB紙にかけるかなぁ。』と思いました。だけど、ぜったいに二班のみんなとがんばってやればできると思いました。

（古川　純）

子供たちだれもが真剣に準備をしていた。鮮やかな緑に色どられた山、その山から流れ出る大きな川、川に沿って並んでいる石がある。また、川には魚やザリガニが泳ぎ、木にはカブトムシ、山や空には鳥や動物があふれている。

教室は見事に子供たちの手により『自然』へと変わり、まさにグリンピースランドとなったのである。

文化祭当日、コーナーめぐりの時間となった。

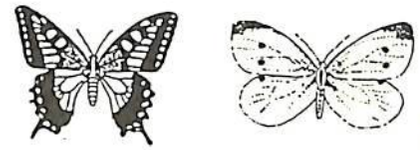
「もう、外で十人も待っているよ。」

「早くCMしてこなくちゃ。」

「おーい、もう中へいれるよ。」

「よーし、始めようか。」

「グリンピースランドにようこそ。」



一班…クワガタ大図鑑
二班…自然は友達（ヒマワリ）
三班…水の中に住む生き物
四班…草花遊び
五班…自然の喜び
六班…花や実の植物
七班…飛べ、飛べ、わし
八班…自然の中の虫（カブトムシ）

はじまってすごい人がきました。すごい客でうれしかったです。最初に魚や動物の絵をかいてもらって、かけない人はつりをしてもらいました。こんなに来てくれるとは思いませんでした。ぼくは声をたくさん出したのでつかれてきました。

（山口　哲平）

子供たち一人ひとりが係につき、責任をもって行動している。とくに低学年に対してはとてもやさしく手を取って案内をしている姿はたいへん立派であった。

そして二時間が過ぎた。

「もう終わっちゃうの。早すぎるよ。」

「おもしろかったね、またやりたい。」

などの言葉を残し、「上地っ子文化祭」が終った。

文化祭でいろいろな人の笑顔、笑い声をたくさん知りました。とってもとってもうれしかった。

（林田　美紀）

みんなが力を合わせて、いい文化祭にしたいと言う気持ちがあったからこそ、成功したと思います。（大平　明奈）

かたづけはとってもつかれました。でも私たちのコーナーに来て楽しんでくれた人たちのことを考えると、たちまち力がわいてきました。（田中　琴恵）

文化祭を終えてからの子供たちを見ると、「協力することの大切さ」、「全力を出し切ることの喜び」を体で感じとったように思う。なぜなら自分のことだけでなく、友達に対しての思いやりの心が生まれ、クラスが今まで以上にまとまってきたことがあらゆる場面で垣間見ることができるからである。一歩ずつ、確実に子供たちは成長しているのである。

四年生の子供たち（二分の一の大人たち…十才）が、「上地っ子文化祭」の貴重な体験を生かし、これからも自分の力で成長していってほしいものである。

三年生の短い夏 ～ 水泳の授業より ～

三年担任　竹平　真仁

「ねえ、先生。三年生からは、深い方のプールに入れるんだよね？」

五月三十一日のプール開きの前から、子ども達は水泳の授業を楽しみにしていました。

ところが今年は、梅雨に入ったというのに、一向に雨の降る気配がありません。一度も泳ぐことなく、節水の為プールの使用禁止という異常事態となりました。教室で子ども達を前にして、そう伝えると、

「えー。そんなあ…。」と、がっかりした様子。

それでも、お天道様が相手では勝ち目がないと、子ども達もあきらめたのか、それほど催促の声も聞かれませんでした。

さて、待望のプール使用許可が下りたのが、もう七月も近いという頃でした。しかしなんということでしょう。今までの分までというわけではないでしょうが、今度は無情にもプールの割り当てのある日は雨ばかり降るのです。それでもやっと、七月六日に今年初めてプールに入ることができました。

あいにくの天候で少し水が冷たかったのですが、子ども達は大喜びです。

まず、準備体操。そして低学年プールで水慣れをして、泳力テストを行いました。

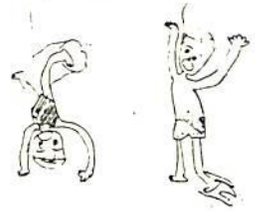
「あーあ。立っちゃったー。」

久しぶりに泳ぐせいもあって、どの子も必死なのですが、昨年泳いだ記録にまで達しない子がほとんどです。みんな、とても悔しそうで、もう少し泳げたのになあという表情をしています。

泳力テストの結果、二十五メートル泳げた子はAコース。十五メートル以上泳げた子はBコース。それ以下の子はCコース。というように三段階に分けて、これからの水泳の授業を行うことにしました。

ところが、そうやって分けてみるとCコースの子が圧倒的に多く、これではとても指導が行き届かないという理由で、急遽、十メートル泳げた子はBコースに行ってもらうことになりました。各コースに分かれて本格的な練習が始まりました。

高学年用プールで泳ぐAコースの子達は、さすがに上手です。二十五メートルでは物足りないと、五十メートルにも挑戦です。また水と一体になって魚のように自由に泳ぎ回る姿が光っています。その隣はBコースの子達です。とにかくがむしゃらで、二十五メートル泳げるようになりたいという想いが伝わってきます。息つぎがしっかりできるかどう



絵　森嵜左千

かがポイントです。

低学年用プールではCコースの子達です。この段階の子達は、まず浮き身をとることが苦手なようです。そこで蹴伸び（伏し浮き）の練習からスタートです。頭をしっかり沈めれば、人間の体は自然に浮き上がるようになっています。しかし、なかには水そのものに抵抗のある子達もいます。そういった子達はまた別に、水と親しむことから練習を始めました。水中での輪くぐりや棒くぐり、はたまた、友達や教師の股くぐりなどしているうちに、上手に潜れるようになっていきます。ここからは本人のがんばり次第です。最初は顔に水がかかるのさえ嫌がっていたある男の子は、練習を繰り返すうちに、

「先生。もう一回やってみてもいい？」

とやる気を表すようになりました。

ただ、残念なことに冒頭に述べたような理由で、今年はプールに入る回数が少なく、三年生では計四回（授業時数にして八時間）しかとれませんでした。子ども達にとって、大変貴重な時期であるのに、この回数は少な過ぎます。やっと調子が出たところで、一学期の水泳の授業はもうおしまい。子ども達も物足りないようですが、限られた練習の中で、少しでも上のコースに行きたいというがんばりが見られたのは嬉しいことでした。

初めにあさい方で水なれをして、深い方に入りました。わたしはさあちゃんといっしょにやりました。初めはビート板つきでした。一回目は足がついてしまいました。二回目は苦しかったけど。足はつきませんでした。三回目もつきませんでした。

今度はビート板なしです。足もつかずに行けました。初めてなので、いつもより心ぞうがドキドキしているようでした。二回目も三回目もつきませんでした。

さあちゃんといっしょにAに行きたかったので、もう一度やったら、さあちゃんは「わたし少し休むね。」と言ったので、熊谷先生に、

「先生。四回足つかずに行けたけど、Aに行っていいですか。」

と聞いたら、うんと言ってくれたのでAに行けました。

また、心ぞうがいつもよりドキンドキンとしていました。（近藤　さち子）

時間が限られていたからこそ、逆に集中できたとも言えるでしょう。

夏休みが始まります。真っ黒になるまでプール開放にも通ってほしいものです。

みんなで野菜を育てたよ

――生活科の授業を通して――

二年担任　太田　智恵

「先生ーだいだい色のが見えてる。」

「にんじんが、できてるよー」

子どもたちは口々にさけんだ。見てみると確かににんじん色のものが、土の中からのぞいている。生活科の授業で、みんなでまいた種がやっと成長したのだ。

二年二組では、四つの野菜の種をまいた。一年生の時にすでに、さつまいもを作っており、食物に対する関心は深い。クラスで話し合って育てたいものを決め、学校に近い上地農園へ買いに行くこととなった。購入する種は、にんじん、えだまめ、トウモロコシ、それにミニトマトである。顔いっぱいの笑顔で、子どもたちは元気良く上地農園に歩いていった。

「にんじんの種はな、土の上にばらばらっとまいてな、土を上からさらさらっとかけるんだよ。」

上地農園のおじさんは、実演して説明してくれた。子どもたちは、身を乗り出して熱心に聞いていた。思わず立ち上がってしまい、後ろの子に非難される子もいた。

教室に帰ると、さっそく種の袋を開き、一人一人に配った。

えだまめとトウモロコシは、形が大きいので、均等に配ることができたが、問題はにんじんとミニトマトである。

にんじんやミニトマトの種は、小さく、だいたいのひとかたまりとして班の机の上においた。それを子どもたちは、班の中で一粒一粒丁寧に分けた。

子どもたちの数える声を聞いていると、班によって一人あたりの分け前が違うようである。すると、

「三班より一班のほうが五つぶも多い。」

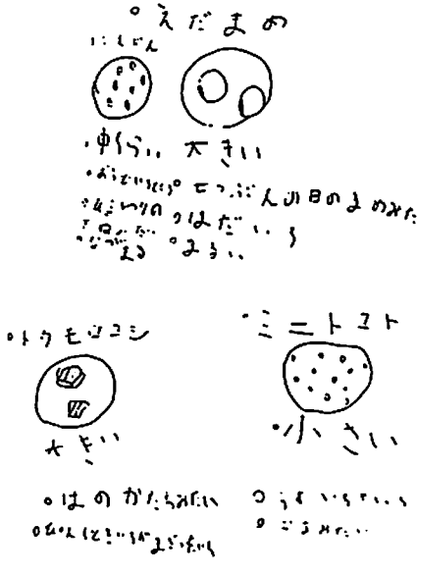
「五班はもらいすぎだから、少ない班にまわして。」

というように、一粒も見逃さないようである。

そんな彼らであるので、教室の中に強い風が吹き込んできた時は、大変であった。

風は、いっぺんに机の上の種をさらっていき、種は床に散らばった。

子どもたちは、慌てて床にはいつくばって、一粒一粒拾うことになり、私はその慌てぶりを見てつい吹き出してしまい、子供たちに叱られてしまった。



教室の前の花壇を七つの班に分け、さらにひとつの班の場所を三つに区切って、にんじん、えだまめ、トウモロコシを植えた。ミニトマトは、一年生の時に育てたあさがおの植木鉢にまくことにした。

小さな花壇に、たくさんの種がまかれることなってしまった。

「ねえ、先生。トウモロコシたち早くおおきくならないかなあ。」

「ちゃんとお水あげなくっちゃいけないね。」

子どもたちは、放課になるたびに花壇のまわりを囲み、じっと、自分がまいた種のあたりをながめていた。子どもたちのこんな様子を見ていると、きっと野菜の種たちは我慢できなくなってすぐに芽を出すのではないかと思われた。

子どもたちの思いが通じたのか、一週間ほどたってついに芽が出てきた。毎日花壇をながめていた子どもの一人が発見したのだ。その子は、さっそくわたしのところにやってきて知らせてくれた。わたしも子どもも楽しみにしていたので、すぐに行きみんなで花壇を囲んだ。

よく見ると、二種類の芽が出ていた。二つとも細い形をした葉を持っている。トウモロコシとにんじんの芽である。

花壇のあちこちの小さな芽はとてもかわいらしかった。大喜びの子どもたちは、さっそくじょうろに水をくんできて、芽に水をあげていた。

九月十日。きょうは、いよいよにんじんを収穫する日である。

チャイムがなると、子どもたちは、いつもより慌ただしく教室に入ってきた。みんなやや興奮気味で、落ち着きがない。

私が教壇に立つと、

「先生、きょう、にんじんとるんでしょう。」

「ぼくたちの班、ほとんどちゃぼに食べられちゃったよ。どうするの。」

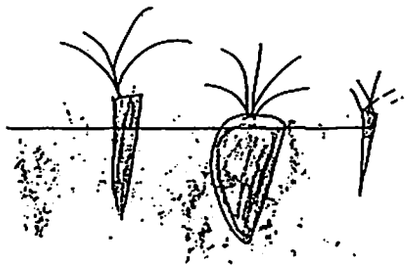
「おれたちの班のを手伝えよ。」

と次々に声を上げた。早く収穫したくてしょうがないようである。

「では、今からにんじんの収穫を始めます。」

と言うと、次の指示をする余裕も与えないいきおいで、すぐに席を立ち、あっというまに飛び出していった。

にんじんの葉は、三十ｃｍから四十ｃｍの大きさに成長していた。
葉の大きさからすると、土の下のにんじんは、かなりの大きさらしい。先生も子どもたちも、おおきなにんじんを期待し、目を輝かせた。
「さあ、にんじんを抜きましょう。」
その一言で、われさきににんじんの葉をひっぱりはじめる。
「わあ、にんじんだ。」
「あれえ、ちょっとしかない。ちびにんじんだ！」
大きく立派な葉をひっぱると、葉の根本に小さなにんじんがくっついていた。想像していたものとは違っていたが、かわいらしいにんじんに、子どもたちは、大喜び。
大きいもの、小さいもの合わせて、約八十本のにんじんを収穫することができた。



にんじんを、せいかつのじかんでほってみました。そしたら、ふといの、ほそいの、長いの、みじかいのがあって、とてもとってもおもしろいにんじんでした。
（内藤慶美）

野菜づくりを通して子どもたちは、自分から進んでやれば、できることがいっぱいあることに気づいたと思う。
私にとっても、よい経験であった。

おいも集会にむけて

一年担任　清水　由美子

十月十九日火曜日、天候が心配されたが、いもほりと焼きいもが無事行われました。
六月十五日火曜日にさつまいもの苗を植えてから、水をあげたり、草むしりをしたり、世話をしてきました。朝から子供たちは、たくさんいもをほりたいと、うきうきしていました。一時間目から、いもほりのスタートです。
「大きいいもがあったよ。」
「なかなかおいもが出てこない！」
「先生、五つもいもがほれたよ。」
土だらけになりながら、うれしそうにいもをほる子供たち。一年生全部で七百三十二個も取れました。さっそくアルミはくでいもを巻いて、もみ殻を燃やした中に放り込みました。煙で目に涙をためながらも、おいしい焼きいもができないかといもを見守る子供たち。大きな声で「おいもいただきます。」の歌を歌って、できたての焼きいもを食べました。ほっかほっかのおいもでした。

（きょうこ）

きょう、ぼくは、がっこうでやきいもをたべました。あったかいやきいもでした。いっぱいとれました。十一ことれました。おもしろかったです。おいもがおいしかったです。
（おさむ）

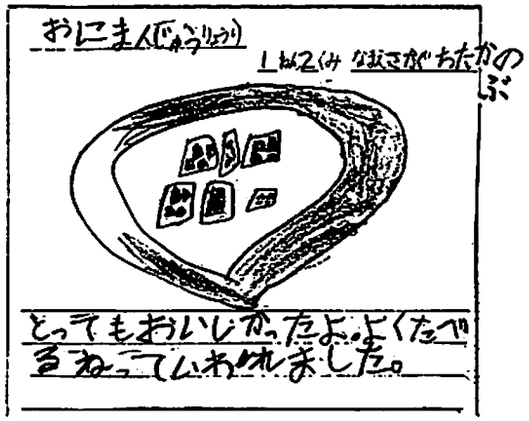
やきいもをしました。いもをやいていたらけむりがめにはいってしまったので、ちょっとだけなみだがでてしまいました。いもがやけたのでたべたました。おいしいとおもいました。

（たかまさ）

二個おいもをお土産に持ち帰った子供たちは、家庭でいろいろなおいも料理を作ってもらいました。

おいもりょうりをたべたよ。

おいもりょうりをたべたよ。



おいしいおいも料理を食べた子供たちは、お礼の気持ちを込めた『おいも集会』を十一月八日月曜日に開くことになりました。今、その準備の真っ最中です。

おいも集会　プログラム

一・はじめのことば
二・こうちょうせんせいのおはなし
三・げき　『大きなおいも』（四くみ）
四・さつまいもクイズ（二くみ）
五・おいもりょうりのしょうかい（一くみ
六・うた　『おいもパラダイス』（三くみ
七・なるせさん、田中さんへのおはなし
八・おわりのことば

おいもパラダイス（アイスクリームパラダイス　のふしで）

＜一番＞

♪おいもができたパラダイス　おいもができたパラダイス
ウウウ　ウウウ
砂糖屋根の大学いも　お気に入りの大学いも
からり揚げたら天ぷら　ちょっとおしゃれな天ぷら
バクバクバク　うううう　おいもだ
バクバクバク　ううう　おいもだ
夢の中に　出てきた町
みんなの大好きな　おいもパラダイス

『おいもパラダイス』の歌を練習したり、さつまいもクイズの問題を考えたり、一生懸命です。問題をB紙に書く子、天才博士の帽子を作ったり、衣装を考える子、みんなが問題を考える時の音楽を練習する子、など、いろいろな役に分かれて楽しそうに練習に励んでいます。当日が楽しみです。

同一作者の本を読んで、発表会をしよう。

六年四組担任　鈴木　千恵子

十月の読書強調月間に行われた図書委員会主催の『ぶどう読書』（六年生の目標は、一人千ページを読もうというものでした）に子供たちは意欲的に取り組みました。そこでただ読むだけでなく、作家についてももっと知ってもらおうと思い「同一作者の本を読んで、発表会をしよう」という計画をクラスで立て発表会を開きました。

上地小学校の図書館には、どんな作家の本が多いのだろう

・椋鳩十・松谷みよ子・宮沢賢治・庄野英二・志賀直哉・杉みよ子・千葉省三・川村たかし・芥川龍之介・今西祐行・岡野薫子・今江祥智・安房直子・小川未明・斎藤隆介・新美南吉・まどみちお・斉藤洋・岡田淳・角野栄子・寺村輝夫・後藤竜二・谷川俊太郎　などなど

本棚を眺めていると教科書に作品が載っている作家は、本の前に名前が表示されていて大変分かりやすくなっています。蔵書冊数約九千百冊の中には、現在活躍中の作家から、すでに故人となり全集として作品がまとまっている作家まで、千差万別、どの作家にしようか迷うほどです。

七人の作家を調べて、発表会をしよう。

いろいろ迷ったものの子供たちと本集めした結果、次の七人の作家を七グループに分かれて調べる事にしました

・椋鳩十・松谷みよ子・宮沢賢治・新美南吉・寺村輝夫・谷川俊太郎・斎藤隆介

調べた事・発表会をして分かった事

調べてまとめるのに約一週間。発表会は二回に分けて次のことを発表し合いました。

（一）作家の年譜

作家の生年月日、出生地、成育歴から、作家が書いた本の傾向がなぜそうなったのか分かってきました。

＜椋さんの年譜から＞

椋鳩十さんの年譜を見ると、椋さんのお父さんは狩猟家で、椋さんは少年時代から山歩きなどをしていたと書いてありました。だから、椋さんは動物が大好きで、動物に関する本が多いんだなと思いました。

山本　佐弥

（二）著書

子供たちが調べて分かった著書の数とその中で上地小学校の図書館においてあるものを調べた結果、作家の著書の傾向がよ

りはっきりしました。

作家名	調べて分かった数	上地小にある数	傾向
椋鳩十	三十四冊	二十八冊	動物の話が多い・教科書に有
松谷みよ子	二十三冊	十八冊	昔話や戦争物が多い・教科書に有
宮沢賢治	二十三冊	十七冊	動物を人間の代わりに登場させる・教科書に有
新美南吉	十四冊	十一冊	愛知県出身・昔話が多い・教科書に有
寺村輝夫	四十九冊	三十九冊	王様シリーズなどシリーズ物が多い。
谷川俊太郎	四十四冊	七冊	詩人だが幅広い活躍をしている。・教科書に有。
斎藤隆介	二十六冊	十四冊	昔話で短い話が多い。滝平二郎とのコンビが多い。

(三) クイズ

作家クイズを作って発表会の時に各班から出題しました。全問正解する人はとても少なくて、やっぱりまだまだ知らない事が多いんだなという事があらためて分かりました。

<地元の作家新美南吉さんの問題です。みなさんも考えてみてください>

(問) 新美南吉さんの生まれた時代はいつでしょう。

①昭和時代
②大正時代
③明治時代

(問) 「ごんぎつね」のお話の中で、ごんが栗やまつたけをあげたのに、兵十はだれからだと思ったでしょう。

①死んだおっ母
②エンマ大王
③神様

(問) 新美南吉さんが、死力をつくして書いた本は何でしょう。

①ごんぎつね
②花の木村と盗人たち
③天狗

<解答>
②大正
③神様
③天狗

(四) 初めて挑戦するブックトーク

何冊かの本を筋道をつけて紹介する事を、ブックトークといいます。初めて挑戦することなのに、ブックトーク役のどの子も上手にしてくれたので、びっくりしました。

内藤　愛美

最初にブックトークといわれた時、何をやるのか分かりませんでした。その後、先生が三冊の本を紹介してくださるのを聞いて、話を続けて本を紹介していく事なんだなあと分かりました。でも、だいたい内容は分かったけど、難しいなあと思いました。私の担当の谷川俊太郎は詩人なので一つ紹介するとすぐ終わってしまい

ます。だから、もっともっとくわしくしらべて、発表する時はしっかり言いたいと思いました。

※内藤さんは、ブックトークの際には、聞いている人にわかりやすいようにペープサートを作って紹介してくれました。

（五）感想発表

作家のことがよく分かったという感想が多く、とてもうれしくなりました。本をただ読むのでなく、書いた作家にまで思いをめぐらせられたら、もっともっと読書の楽しみは広がっていくと思います。みなさんも、ぜひ一度作家にこだわって読んでみてください。

中原　規之

僕は、今年初めて同一作者の本の発表会をやりました。こういうことは、初めてなので、どのようにして進めて行けばよいのかよく分かりませんでした。だけど、同じグループの友達と助け合い考え合いながら進めているうちにだんだん分かってきました。

僕たちのグループでは、宮沢賢治さんのことを調べました。宮沢さんの著書の中で「注文の多い料理店」という話は、五年生の教科書に出てきたので知っていました。でも、もっとくわしく調べていくうちに作家の考えやどういう人なのかということまでよく分かってきました。特に、友達と協力して調べたので、たくさんのことが分かったと思います。

これからも、みんなで助け合って、いろいろな事をやってみたいです。そして、もっとたくさんの本を読みたいと思います。

自分の身長はおよそ何センチ？校舎の高さはおよそ何ｍ？

～算数『一人調べ』の取り組み～

五年担任　深津　伸夫

一・　自分の身長はおよそ何センチ？

「今日は一時間ごとに自分の身長を測ります。」

突然、身長測定器をかついで教室へ入ってきた私の姿を、みんな「どうしてそんなことをするのだろう。」と不思議そうな顔で見つめ返してきました。

その日は一つの授業が終わるごとに一人ずつ身長を測定しました。身長というのは時間がたつと少し変わるもので、みんなの身長も一回ずつ微妙に変化していました。初めは、みんな、たった一時間でそれだけの変化があるのに疑問を持ち、

「先生の測り方が悪いんじゃないの。」

などと言っていましたが、何回も測定していくうちに、だんだん身長が変化していくことに気づいてきたようです。

「また（身長が）減っちゃったらどうしよう。今度こそがんばるぞ。」

全部で五回の測定をして、測定値を記録しておき、その変化を調べることにしました。だいたい一回目の測定が一番高い子が多く、その後はだんだんと低くなっていました。でも、給食を食べた後に、身長が伸びた子が少なからずいたのが不思議でした。この身長の測定で、みんなが自分の体の微妙な変化に興味を持つとともに、測定することの難しさや何度も測定することの大切さを知り、この後の『平均』の授業で生かすことができました。

『平均』を求める授業では、この身長の測定値を基にして、自分の考え方で、一番いいと思う値を求めることをしました。

「棒グラフ」「折れ線グラフ」「絵グラフ」「数直線」いろいろな図表を使って求めることができました。

算数の授業では、ほとんどの場合が公式に当てはめて式を立て答えを求めることだけに終わってしまいがちですが、どうしてそうなったのか理由を紙に書いてみたりすると、より理解が深まるような気がします。実際に子どもたちが書いた図表はすばらしいものばかりで、「よくこんなことに気づいたな。」と感心させられてしまいました。

自分の考えをまとめた後には、みんなで発表し合い、友達の考えを聞きながら『認め合い、練り合い、磨き合う』授業をしてきました。

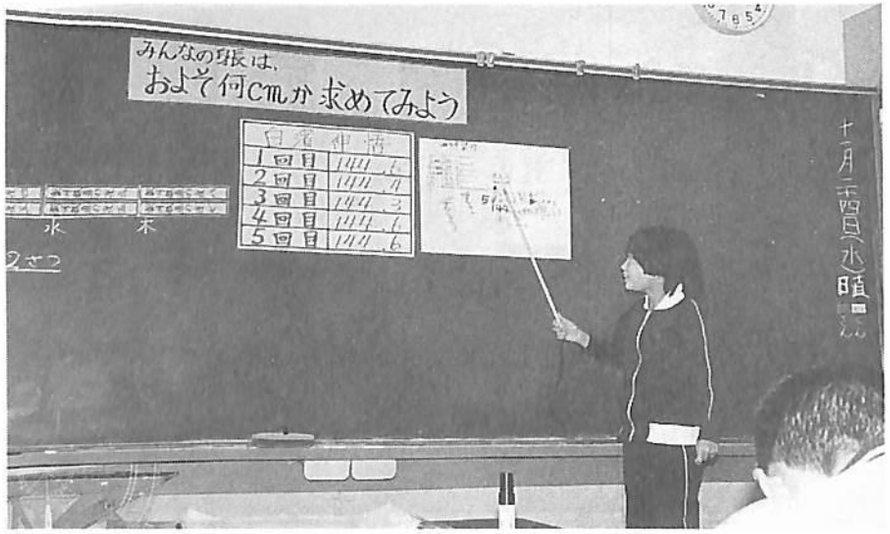
算数日記

私は平均で求めた方がいいと思います。一番多くでた数字とかは、あんまりはっきりしないので、算数で求めるなら平均を出した方がいいと思いました。

（鈴木春佳）

二・　校舎の高さはおよそ何ｍ？

『平均』の授業の後に、上地小学校の校舎の高さを測ること



「私はこんなふうに考えました。」

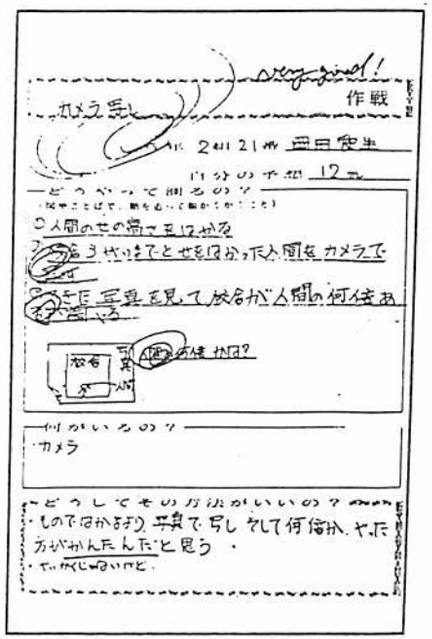
にしました。今度は『概測』の授業です。

測定したのは南舎三階のてっぺんまでですが、測るといっても簡単には測れるものではありません。そこで、「一人調べ」の計画を立てました。

「南舎の高さを測るには、どんな方法がいいのかな。」

この質問には、私が思いつかないような独創的なアイディアがいくつか出てきました。

子どもたちが考えた測定方法は、

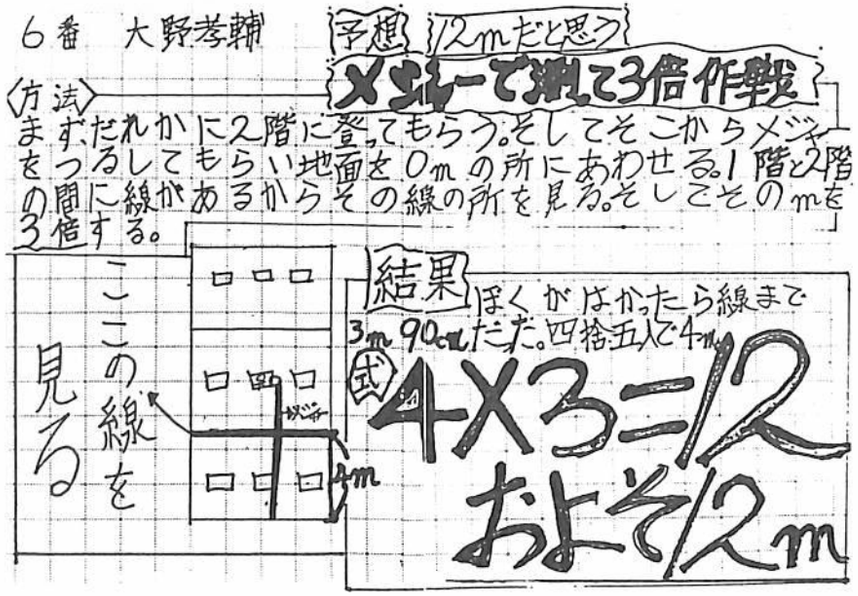


「４５度ってこれくらいかな。」

・一階の高さを測り三倍する
・ひもで上まで測る
・目で見て考える
・高度測定器で四十五度を作って測定する
・北舎の四階から見て、メジャーで測る
・校舎の影と一m定規の影を比べる
・写真に写った自分や一m定規と比べる
・凧船を飛ばして測定する
・校舎の向こうまで物を投げ横の長さを引いて二で割る

など、さまざまでした。中には実際にやってみたら測定できなかったというものも出てきました。

自分一人で測定するということで、答えの方も何十種類と出てきました。もちろん私も測定してみました。子どもたちにはできない方法ですが、竹内先生に手伝っていただき、実際に南舎のてっぺんからメジャーをたらし、下まで測るという方法です。その結果は十二、一mでした。



この授業では、出てくる数字のすべてが測定した結果なので「これが答え」というものはなかったのですが、発表の場面では、子どもたちが独自の考え方で意見を交わしていました。

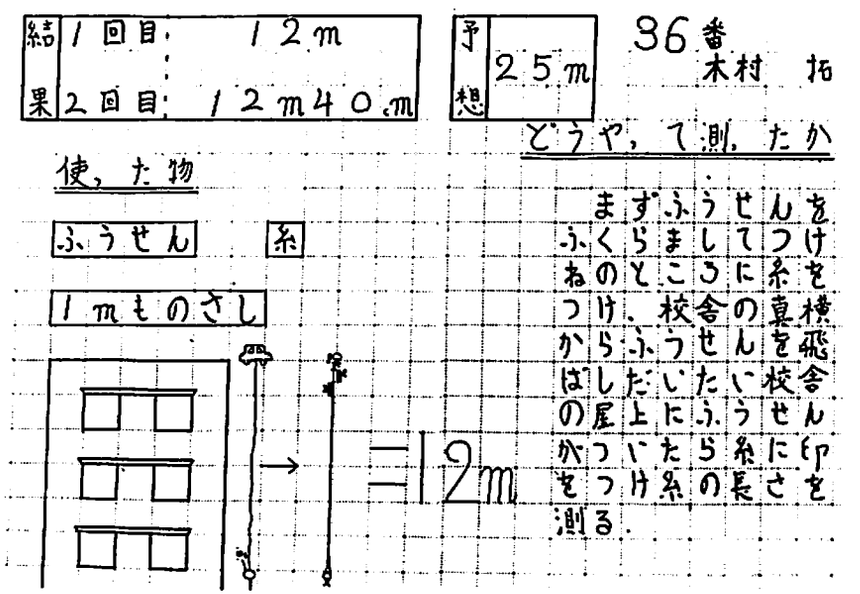
二、話し合い活動を通して

五年生も後半に入り、学校全体の活動でも中心になっていこうという意識が見え始め、心も身体も大きく変化しつつある子どもたちにとって、自分の考えを表現することは、自分に自信を与えクラス全体に働きかけていく原動力となるものです。

クラスでは算数の授業に限らず、いろいろな場面で話し合い活動を進めてきました。全員で何かを見つけたり、作り上げたりするのには、一人ひとりの考えがはっきりしていなくてはできないと思います。今回のように「一人調べ」を重ね、話し合い、何かを見つけ出したときには大きな成就感がありました。

子どもたちは、私たちでは考えつかないようなすばらしいアイディアをたくさん持っています。「それを眠らせておいてはいけない」そんなことを感じさせられました。

『考えること』『話し合うこと』ってすばらしいですね。



自信を持って演じよう

学芸会に向けて

四年担任　松井敬子

「先生、学芸会は何をするの。」

三学期始業式の日の朝、職員室にやって来た二、三人の女子が声をはずませて言った。今年は劇ということで子供たちも興味津々といったところであろう。早く知りたい、早く練習を始めたいといった気持ちが伝わってきた。

そこで、

「式の後で学芸会について話をするから待ってて。台本を配るからね。」

と返事をすると、歓声を上げて教室に戻って行った。その姿を見て、私自身の気持ちもやる気に満ちてきた。

我がクラスは、「一人ひとりが生き生きと活動する学級づくり」の一環として、一学期より音読指導に力を入れてきた。一学期は「たかの巣取りの音読発表会」、二学期は「岡崎の昔話を語ろうの会」と発表の機会を設けてきた。そして、三学期は学芸会を発表の場として四十人一人ひとりが自信を持って演じ、後でやり遂げた満足感に浸れるような劇に仕上げることを目標に取り組ませたいと願った。

始業式が終わり、いざ脚本を持って教室に行くと、子供たちは待っていましたとばかりに嬉しそうな表情で、

「学芸会の台本だ。どんなの。」

とつぶやきながら、劇の「たろ天、じろ天」の世界に入っていった。

こうして、一月七日、クラスが学芸会に向けて動き始めた。

――四年三組　劇「たろ天、じろ天」に決まる――

一月十日、劇の配役を決めた。子供たちは、「やりたい役に立候補し、立候補が多い場合はオーデションというやり方で決めていった。ここで、問題が一つ生じた。てんぐ、どろぼうや村人役は立候補がいたが、大男役の立候補がいない。そこで、体格の良さ・声の大きさなどから適任とみられるI君にみんなが頼み、I君も快く引き受けてくれた。

・たろ天（二名）　・じろ天（二名）　・どろぼう（二名）
・旅人（三名）　・大男（一名）　・村人（十名）
・コール隊（二十名）

――めでたし、めでたし――

翌日十一日より、いよいよ、立ち稽古を始めた。下見の会がある二十日まで土、日曜日除いた七日間で一通りの演技ができるようにしなければならない。あせる心を押えて毎日が必死の思いだった。子供たちも一日でせりふを覚えたり、やり直しを何度のしたりして、一生懸命ついてきた。このとき一、二学期の音読会の経験が生きたのは言うまでもない。

連休明けの一七日、何とか劇を一通り流せる見通しがついてきた。少し気持ちにゆとりができた分、今度は演技に欲が出てきた。子供たちも台本にないせりふを考えたり、せりふのないところで動きを考えたり、せりふの言い方を工夫したりと、より良い劇にするためにいっそう練習に熱が入り始めていった。

たろ天じろ天が最初にお目見えする場面

そんな中、明日が下見の会という十九日、劇全体がコール隊の七五調にうまくのれないということで、ピアノ、ウッドロック、大太鼓を入れようということになり、Aさん、Hさん、Tさんの三人がこれに挑戦してくれた。そのおかげで、みんなの演技に味が出てきたようだ。

一月二十日「下見の会」

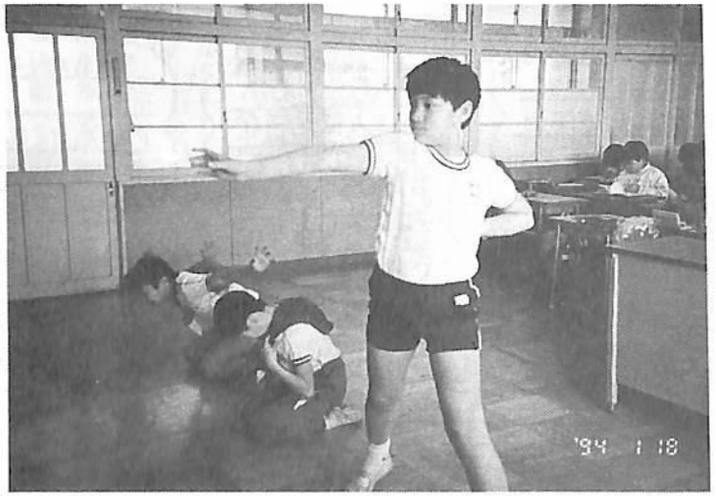
いつも、体育館での舞台稽古では一通り流すことはなかなかできない。みんな不安の気持ちで緊張しながらの演技だった。それでもなんとか無事にでき、そっと胸をなぜおろした。子供たちも少しは自信がついてきたようであった。翌日から、下見の会で指導していただいたことを丁寧に練習し、直していこうと、また、みんなでがんばり始めた。

一月二十七日　学芸会――

校内学芸会の時、ぼくは自分たちの出番が近づいてくるたびにきんちょうして、心ぞうがどきどきしてきました。大きくしんこきゅうしてぶたいにでたら、客席に人がいっぱいいて体全体ががくがくしてきました。でもはずかしがらず、思いきって大きな声で言いました。

日曜日の学芸会も村人になりきってえんぎしたいと思います。

藤田孫充



大男にお礼を返してもらおうと頼みこんでいる旅人の場面

足のいく劇に仕上げてきた。学芸会当日は、自信を持って堂々と　　技できることを心から願っている。

この三週間、一人ひとりが真剣に練習に取り組み、みんなで満

＜ 学芸会に向けて ＞

ぼくはどろぼうの役です。中通力で重い荷物が軽くなったのを本当に軽くなったように演じたい。本番では大きな声でうかえない様にしたい。
豊田直樹

ぼくの役はおやじ天ぐの声です。本番にはほんとうに役になりきってしんけんになってやりおやじ天ぐの声では、おやじらしい声を出してやりたいとおもいます。
杉田賢市

わたしは村人の役です。大男に立ち向って行く時にいきおいをつけていきたいと思います。せりふは少ないけどがんばりたいです。
伊与田仁美

たろ又のやくでいっしょうけんめい練習しています。大男たむかっていくところは、しんけんにたたかうみたいにやりたいです。学げい会ではみんなが見るので、いっしょうけんめいやりたいです。
中原広志

ぼくは、学芸会で大男の役をやります。この役は悪役です。投げとばすところをほんとうに投げているように演技するので期待していて下さい。
市川智英

私は、村人のやくです。大男と村人でつなひきで勝負して大男にふきとばされた時もうちょっと、いたそうな気持になりたいです。大きな声大きな動作でやりたいです。
中野幸恵

わたしはコール隊と大太鼓をやります。学芸会では、大きな声ではっきり言うことと大太鼓を、元気くたたくことをがんばりたいです。
藤本有希

コール隊で、自分の言うわかうぬ二人は元気なく思いなやんでおりました。と全いんで言うせりふをはっきり言う。
金子木太郎

わたしはコール隊です。声を大きくはっきりと言いたいです。動作をしっかりやりたいです。ずっと立っていても、せすじをのばしてがんばりたいです。
寺野美紀子

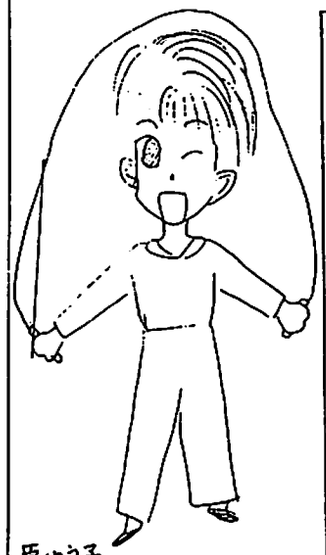
なわとびに挑戦

三年担任　熊谷　洋子

十二月の体育で「なわとび」を始めました。みんなで順番に回している縄に入ってとび続ける『長なわとび』と一人でいろいろなとび方に挑戦する『短なわとび』。私たちが子供のころは、冬の子供の遊びに大きな位置を占めていた縄跳びですが、この頃では、子供が縄跳びをしている姿を見ることは少なくなってきています。学校でも、特に体育や委員会活動の呼びかけがあったりすれば、放課に縄跳びをする子供たちの姿を見ることができるというわけです。

はら　ゆうすけ　なわとび

木曜日と、金曜日の日に、なわとびをした。なわとびカード上に、丸をつけたいと思って、練習した。あやとびや、後ろとび、二重とびを色々やって見た。できないのも少しあった。友だちと、やったので、楽しかった。学校で、人に見てもらって、カードが全部できるといいなあと思った。早く学校に行って、なわとびをして、なわとびをとぶのをがんばってやりたいです。



原ゆう子

三年生の授業で初めてなわとびをして驚くことは、ほとんどとべない子もいるということでした。『短なわ』でとべなかったりとび方がぎこちない子は、まず縄を勢いよく回すことができません。肩をグルグルと後ろから前へと大きく一生懸命回しているのですが、回っている縄には勢いがありません。また、同じリズムで両足をそろえてぴょんぴょんと調子よくとぶことも苦手のようです。縄は肩で回すのではなく、手首で回すというお手本を見せてやっても、すぐにはできないようでした。

『長なわとび』は、毎年委員会の活動で『長なわ週間』が実施されているのでほとんどの子がとぶことができるのですが、前の子に続いてすぐに縄に入ってとぶということができない子もいました。縄に入るタイミングはなかなか難しいようです。

『長なわとび』は、授業では二つのグループに分け、それぞれのグループの中でとぶ数を競い合ってみることにしました。始めは、グループでとびながら、回っているなわに入れない子が入るタイミングをつかむようにすることが大切です。教師はグループを見ながらできない子と一緒に入ってやったり、入る時に肩や背中をポンと押して教えてやったりしてみました。そのうちに同じグループの子供たちが入るタイミングを後ろから押して合図をしてくれるようになりました。

授業で縄跳びを始めると、放課にも『長なわとび』や『短なわとび』に挑戦する子も見られるようになりましたが、わがクラスの男子の多くはサッカーの方がおもしろいらしく縄跳びをする子はほんの一部でした。そのためか日頃から縄跳びをやっている子とそうでない子との差はますます広がったように思えます。

三学期、学芸会マラソン大会も終わり、いつもの日課いつもの授業に戻り、体育でも「なわとび」に再び取り組むようになりました。

なわとび　　いわた　けいいち

（二月十日日記より）

学校から帰ってからけいじ君とあつし君でなわとびの練習をしました。けいじ君は二重とびの練習で、ぼくは二重とびと後ろとびの練習をしました。あつし君はかけ足とびの練習をしましたぼくはさいしょに二重とびの練習をしました。五回ぐらいできるといいなあと思いました。さいしょは二回できて次は四回できました。けいじ君は十二回できたのですごいなあと思いました。

（後略）

日頃から「なわとび」に意欲的に挑戦している子だけでなく、余り縄跳びに意欲的でない子供たちにも目標を持って挑戦させたいと学年で『なわとび検定』を考え、検定カードを作り、二週間のなわとび週間を設定しました。折しも運動委員会の計画した長なわ週間もその二週目と一緒にできることとなりました。

第一週目

カードを配り、自分の目標を第一週目と第二週目とべつべつに決める。始めからウルトラ級を目標とした統盛君、石川さんはそれぞれ二重とび、あやとびのクラスのチャンピョンです。

なわとび検定

10	1回とん 1.2ちょうやく 20回		／
9	1回とん 2ちょうやく 50回		／
8	1回とん 1ちょうやく 50回		／
7	1分とび（とびかた自由）		／
6	うしろとび 50回		／
5	かけ足とび 100回		／
4	あやとび 30回		／
3	2重とび 10回		／
2	こうさとび 30回		／
1	あやつりうしろとび 20回		／
ウルトラ	2重とび 30回		／

年　組

氏名

検定期間 2月14日 ～ 2月28日

体育の時間や放課にやろう。

目標① 2月19日までに［　］級をめざす

目標② 2月28日までに［　］級をめざす

あなたは なわとびの練習をがんばり　級に合格しました

なわとび検定カード

第一週目は、余り「やれー　やれー」とはいわず、授業で数えたりするぐらいにしました。また、その前の週末に降った大雪のため週の始めは運動場での授業もできず、出ばなをくじかれたような感じでした。それでもカードを配った成果は出てきていました。放課に短縄を持って外に出る子が増えてきました。お互いに数え合って級を進めていきます。しかし、やはりやらない子はやらないようでした。週の終わりになわとび検定カードを集めてみると、何も書いてない子もいます。四組は授業でも放課でもよく検定をしている姿を見かけました。第一週でもう三・四人のウルトラ級が出ており、一分とびができない子は後わずかと聞きやはり少しは発破をかけないと・・・。

第二週目、長なわ週間でもあります。授業と放課に長縄で続けていくつとべるか、週の合計で学年一を決める。この週も第一日目は雨にたたられなわとびはできません。気持ちをそがれるってとてもいやなものです。でも、「先生、三組は教室で長なわとびをやってるよ」「先生いかんって言ったじゃない」と訴えてくるほどですから、子供たちはその気になっています。そこで次の日の学級活動は急きょ体育に変更。『短なわとび』と『長なわとび』に挑戦しました。

中塚あや　長なわのこと。

3、4年生の長なわ週間が始まって、みんながんばっています。わたしたちのクラスでは、さいこう223回です。もっとがんばらないと、他のクラスにぬかされてしまいます。

たくみ君や、だいすけ君も、とべなかったのが、もうだいぶんとべるようになったので、すごいと思いました。なん回も練習したら、ほんとうにみんな上手になったので、よかったなぁ　と、思いました。

短なわとびの検定をした後クラス全員による長なわ連続とびに挑戦です。二学期には、なかなか一人では入ることのできなかった子も何とか入ることができるようになりました。でも、やはりうまくとべずに引っかかってしまうこともあります。またぼんやりしている子がいるとそこで連続が切れてしまいます。第一日目の記録は九二回、他のクラスの二〇〇回以上の記録を聞き、私は少し落胆気味ですが、子供たちは喜んでいます。今まで一人では入れなかったり、すぐ引っかかってしまう子がとべるようになったことを思うとわがクラスでは、この記録が大切なんだと思います。それに、もうひとつ嬉しいと思ったことは、ひっかかったり、とべなかったりする子がいても、みんながその子たちを責めたりしないということでした。心の中ではきっと思うことはあっても口に出して言う子はほとんどいませんでした。

短なわとびは、時間を計る必要のある一分とびはタイムを計るのでどうしても授業時間に限られてしまいます。そこで、この週は放課にも一分と

さいとうなしきさ　長なわ

5月週は、三年生の長なわ週間です。

といわれてびっくりしてしまいました、とつぜん長なわ週間だというがらです、そして長なわ週間の始めの日は、雨で中止になってしまいました、つまんないと思いました。二日目は、できました92回でまあまあと思いましたそしてもうちょっとで100回いけそうだと思いました、次に、三日目は、なんと223回できました、みんな、1、2、3、4、…と、かぞえていました、ぼくもきょうの、きろくがたのしみです。

びを見てほしいという要望が出て、希望者がその時間に検定をすることにしました。

上田ゆうや　短なわ

ぼくは、三年生になってから、よくなわとびをするようになりました。ぼくは、なわと検定が始まってから、ぼくはなわとびをすごいがんばりました。でもぼくはまだ百もゃうのうしろとびでとまっています。だからぼくはがんばっている人だけど、せんせいうしろとびの50回というのはとべません、でもぼくはうしろとびをごうかくして、はやくもくひょうの4きゃうにいきたいです。だからぼくはこんどからもがんばりたいと思います。

なわとび　小林篤史

き、うの、一時間目に、体育でさいし、に、なわとびをやりました。一分とびと、一分とびいがいに、半分に、分かれました。一分とびは、どれも、不ごうかくこみたいな人が、ち、っと、いました。先生が「よーい、始め」と、言いました。でもぼくは、すぐに、ひっかかって、しまいました。つぎもやっても、ひっかかってしまいました。ぼくは、がんばって、うしろあやをこそうとしたけど、ほんとうは、二十回だけど、十九回になって、けいじ君が、「できた？」と、言いました。そして、ぼくは「できなかった」と、言って、けいじ君が、「おしいね」と、言いました、一級もあがらなかったよ。でも、楽しかったです。

松井まい　短なわのこと

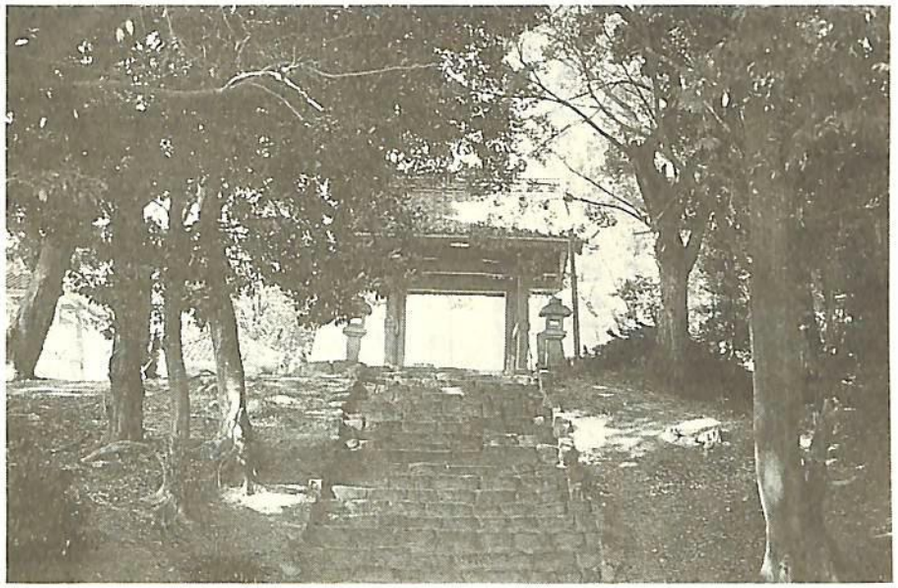
わたしは、さいしょはなわとびがそんなにとくいじゃなかったので、なわとびけんていカードがくばられた時、いやだなあと思いました。でも、二ちょうやくやーちょうやくをこのみちゃんたちとやっている内に、だんだん楽しくなってきて、今ではお昼のほうかいがいはほとんどなわとびをするようになりました。でも、苦せんしたのもたくさんありました。後ろとび五十回や、一分とびがそうです。でも今では両方できています。こんどかけ足とび一〇〇回がとべれば、五級です。もくひょうは三級です。でも二十八日に終わるから、あと三日しかないので、がんばりたいです。また、こういうなわとびけんていを出してほしいです。

短なわと長なわの吉村圭司

ぼくは、いま、ウルトラ級をちょうせんしています。でもなかなかこせません。はじめ、2重とび40回をちょうせんしてるとき、2重とびができるようになりました。2重とび10回をこすと、すぐウルトラ級にいけます。今日こうさ2重が2回できました。あや2重も2回できました。長なわもがんばっています。とてもたのしい。

縄跳びは、手首のスナップが強くなったりリズム感を養ったりするという運動の能力を高めるばかりではなく、自分の目標に向かってくじけず何回も練習することによってうまくなることができます。また、長縄跳びでは友達と協力して記録を伸ばす喜びを感じることもできると共に、自分の番を待ち、遅れずに入るには集中力が必要とされます。低学年では、特にこのような力を培っておくことが必要だと思います。

四、学校ニュース



百丈山三善寺

旧国道２４８号線から山門に通じる階段を上ると、樹齢１００年を越すカシの大木が茂る。元禄１２年に当時の上地奉行早川武左衛門により寄進され、雷の災害から上地を救うといわれる「長命地蔵」も祭られている。